

五十川遺跡9

—五十川遺跡第21次調査の報告—

2018

福岡市教育委員会

五十川遺跡 9

—五十川遺跡第 21 次調査の報告—



調査略号 GJK-21
調査番号 1634

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市では北方に広がる玄界灘を介し、大陸と人や物、文化の交流が続けられてきました。それらを物語る多くの遺跡や遺構が本市には数多く残されており、これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実であり、福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、宅地造成工事に伴って行った五十川遺跡第21次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から中世にかけての集落を確認することができました。これらは福岡の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に事業主様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例言

- 本書は、福岡市南区五十川2丁目251-1、251-2、251-3、251-4における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成28年12月12日から平成29年1月31日にかけて発掘調査を実施した五十川遺跡第21次発掘調査の報告である。
- 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課 山本晃平が担当した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構の実測図作成は、山本が行った。
- 本書に掲載した遺物の実測図作成は山本が行った。
- 本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影は山本が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は山本が行った。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書で用いた座標は世界測地系による。
- 調査で検出した遺構については、通し番号を付している。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
- 本書の執筆・編集は山本が行った。

五十川遺跡第21次発掘調査基本情報

遺 跡 名	五十川遺跡	調 査 次 数	第21次	調 査 略 号	GJK-21
調 査 番 号	1634	調 査 地図幅名	板付24	遺跡登録番号	0088
申 請 地面積	870.02m ²	調 査 対 象 面 積	150.05m ²	調 査 面 積	126.1m ²
調 査 期 間	平成28年12月12日～平成29年1月30日			事前審査番号	28-2-563
調 査 地	福岡市南区五十川2丁目251-1、251-2、251-3、251-4				

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
3 遺跡の位置と環境	2
4 調査区周辺の調査事例	2
第2章 調査の記録	7
1 調査の概要	7
2 遺構と遺物	7
1) 竪穴住居	7
2) 溝	9
3) 井戸	9
第3章 小結	12

挿図目次

第1図 五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1/25000)	3
第2図 五十川遺跡調査地点位置図 (1/4000)	4
第3図 五十川遺跡第21次調査地点周辺遺構配置図 (1/500)	5
第4図 五十川遺跡第21次調査地点全体図 (1/100)	6
第5図 竪穴住居 006 (1/60)	7
第6図 竪穴住居 019・031・026・028 (1/60) 及び出土遺物 (1/4)	8
第7図 溝 001・002 (1/60) 及び出土遺物 (1/4)	10
第8図 井戸 005 (1/40)	11
第9図 井戸 005 出土遺物 (1/4)	12

図版目次

- 図版 1 (1) 全景写真（北から）
(2) 竪穴住居 019（西から）
(3) 竪穴住居 028（南から）
(4) 溝 001（南から）
(5) 井戸 005（西から）
図版 2 (6) 溝 001 出土遺物
(7) 井戸 005 上層出土遺物
(8) 井戸 005 中層出土遺物
(9) 井戸 005 下層出土遺物

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成 28 年 10 月 3 日付で福岡市南区五十川 2 丁目 251-1 他の宅地造成に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡に所在し、周辺の確認調査・発掘調査において遺跡の存在が確認されている。そのため、当該地にも埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成 28 年 11 月 2 日に確認調査を行った。その結果、地表面から 40cm 下で地山である鳥栖ロームに達し、堅穴住居などの遺構を確認した。これらから埋蔵文化財課では、遺構の保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、宅地造成において埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成 28 年 12 月 12 日付で株式会社メイケンを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 12 月 12 日から発掘調査を行い、平成 29 年 1 月 30 日に終了した。整理報告を平成 29 年度に行った。

2 調査の組織

調査委託：株式会社メイケン

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成 28 年度・整理報告：平成 29 年度）

調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

課長 常松幹雄（28・29 年度）

調査第 1 係長 吉武学（28 年度）

調査第 2 係長 大塚紀宜（29 年度）

調査庶務：同課

管理係長 大塚紀宜（28 年度）

管理係 入江よう子（28 年度）

文化財保護課管理調整係 松尾智仁（29 年度）

事前審査：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

事前審査係長 佐藤一郎（28 年度）

本田浩二郎（29 年度）

主任文化財主事 池田祐司（28・29 年度）

文化財主事 清金良太（28・29 年度）

調査担当：同課

文化財主事 山本晃平（28・29 年度）

発掘作業：今村良輔、上野道郎、岡村まさか、瀬戸啓治、時吉ひとみ、富岡洋子、深溝嘉江、
安武陽子、脇田誠二

整理作業：豊田忠一、堀江一美、八木一成

3 遺跡の位置と環境（第1図）

五十川遺跡は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する。その範囲は南北約800m、東西約240m、標高9~11m前後をはかる。五十川遺跡が位置する台地はその南東の春日丘陵から標高を下げながら延びる低丘陵上に立地する。周囲は沖積低地に囲まれているが、北端は鞍部を介してさらに台地が広がり、比恵・那珂遺跡群が立地し、南側では狭い谷を挟んだ台地上に井尻B遺跡が隣接する。

北側の比恵・那珂遺跡群では、水稻耕作の始まりとともにまず台地縁辺部に集落が営まれ、弥生時代中期・古墳時代前期・古代をピークとして遺構が営まれる。特に弥生時代中期には台地中央部に集落が拡大するが、後期に一旦衰え、終末にかけて新たな集落が営まれるようになり、那珂八幡古墳を中心とした墓地エリア、集落エリアの配置が認められる。

南側の井尻B遺跡では旧石器時代や弥生時代前期の遺物が台地縁辺部で出土するが、弥生時代後期前半まで遺構・遺物は多くなく、後期後半になって青銅器生産を伴う大規模集落が営まれるようになる。また古代に入り、瓦や「寺」と刻んだ須恵器等が出土していることから、寺院や官衙が存在した可能性がある。

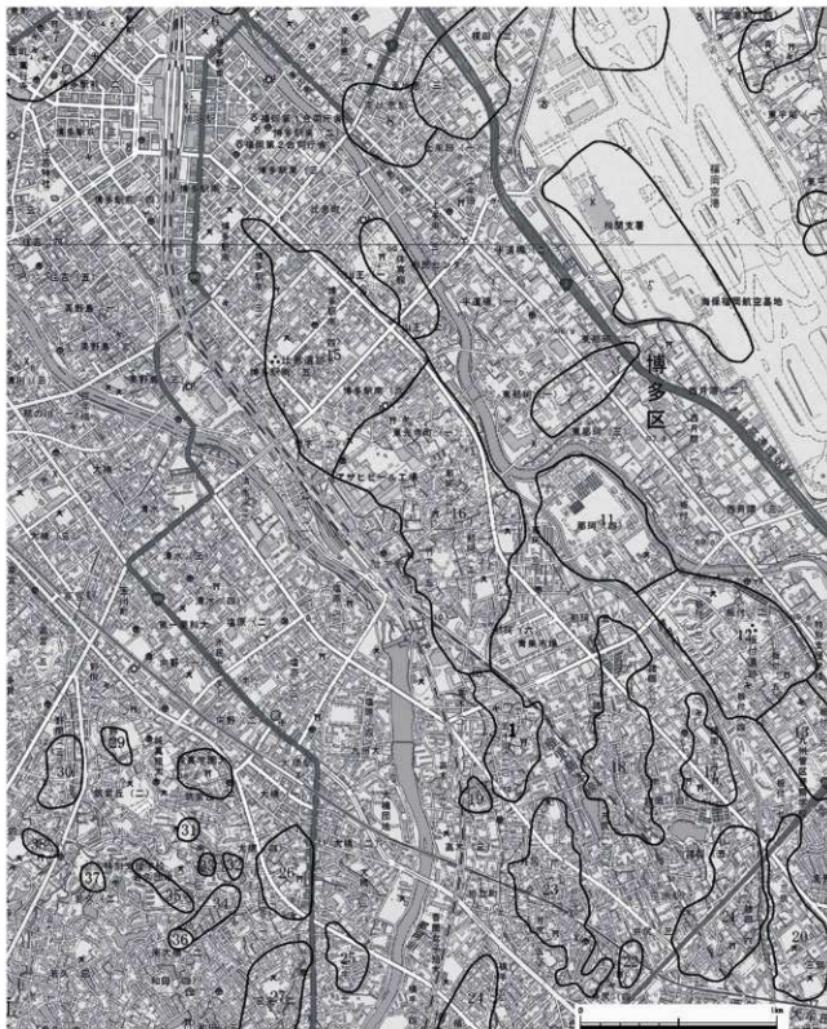
周辺の遺跡の状況を踏まえ、五十川遺跡の変遷をこれまでの調査から概略する（第2図）。旧石器時代の遺物は遺跡の南西部でナイフ形石器、原の辻型台形石器、細石刃などが出土している（第11次・第14次調査）。繩文時代の遺物は打製石器などの出土に留まる。弥生時代前期には、南西部（第10次・第11次調査）と中央東部（第1次・第2次調査）で前期前葉以降の集落が営まれていたことが分かっている。また第16次調査でも溝を確認したが、これらはいずれも低地に面した台地端部に位置している。その後南西部は弥生時代中期前葉まで集落と墓地が継続する。一方で北東部では中期後葉までの土器は出土するが遺構は確認されていない。これらの集落では黒曜石製石器の利用が顕著である。古墳時代に入ると台地上に広く集落と墓地が展開するようになる（第1~4次調査、第10・11・13・14次調査）。古墳時代中期の遺構・遺物はなく、後期になると再び集落の広がりを示すようになるが希薄である。古代には台地上の各所で溝等の遺構が確認でき、瓦が出土する地点もある。中世前半の遺構は希薄だが、後半になると構を中心とする遺構が多く見られるようになり、これらは室町期から戦国期の居館に関連する濠と考えられている。

4 調査区周辺の調査事例（第3図）

今回報告する第21次調査は五十川遺跡の東側に位置し、第3次・第4次調査の北側に位置している。

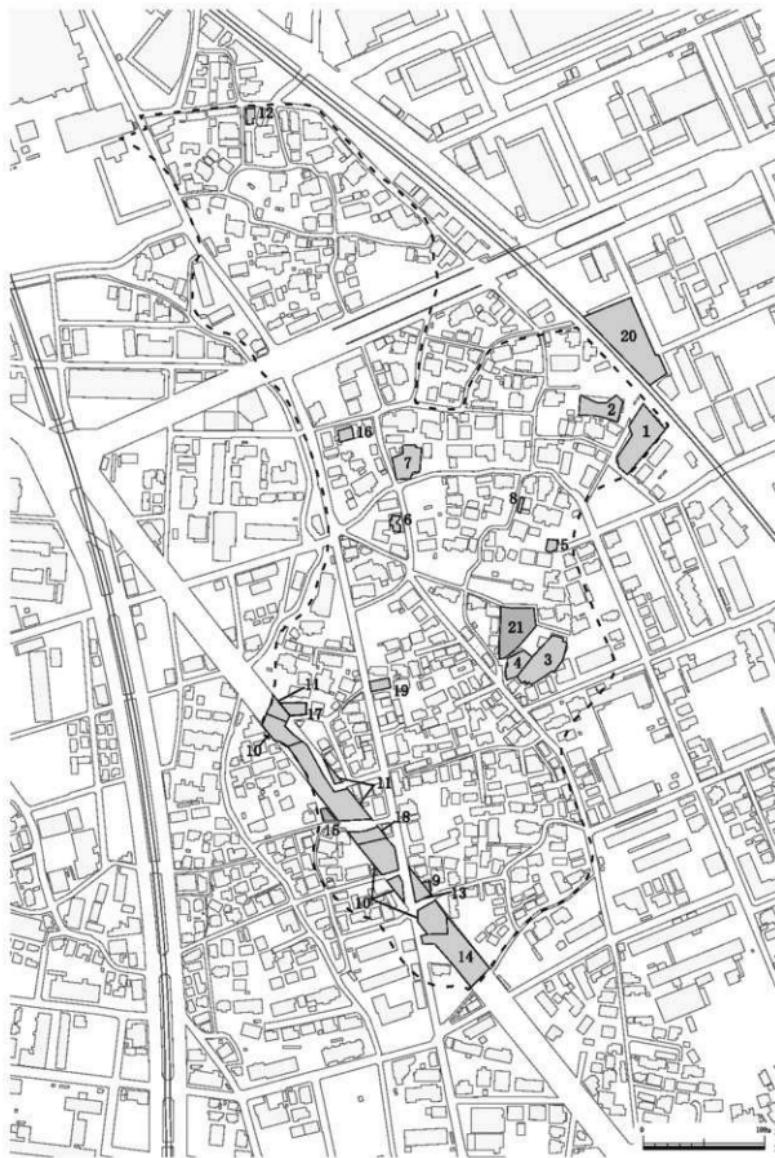
第3次調査では、弥生時代中期後半の上坑、弥生時代終末の堅穴住居、掘立柱建物、6・7世紀の掘立柱建物、9世紀の井戸、土坑、11世紀前半の土塙墓、14~15世紀の溝、井戸、土坑、掘立柱建物などが検出されている。第4次調査では、古墳時代の井戸、中世の掘立柱建物、土坑、溝などが検出されている。

第3次調査のSD03、第4次調査のSD001は中世後半期（14~15世紀）の居館に伴う溝であると考えられ、その内側には多数の掘立柱建物が見つかっている。それに関連してか、第3次調査では弥生時代から古代にかけての遺構は台地縁辺部に近い北東側に限られて、中世後半期の大規模な整地・造成によって、他はかなり削平を受けたものと考えられる。居館跡以前の遺構は削平を受けながらも、弥生時代から中世前半期まで連續と確認されており、当地域では弥生時代以来絶え間なく生活の場として利用されてきたことが明らかになっている。



1. 五十川遺跡群
2. 上白井遺跡
3. 席田青木遺跡
4. 久保園遺跡
5. 席田大谷遺跡
6. 古塚遺跡群
7. 博多遺跡群
8. 東比恵三丁目遺跡
9. 雀居遺跡
10. 東那珂遺跡
11. 那珂若休遺跡
12. 板付遺跡
13. 高畠遺跡
14. 山王遺跡
15. 比恵遺跡群
16. 那珂遺跡群
17. 諸岡 B 遺跡
18. 諸岡 A 遺跡
19. 井尻 A 遺跡
20. 三筑遺跡
21. 笹原遺跡
22. 井尻 C 遺跡
23. 井尻 B 遺跡
24. 横手遺跡
25. 三宅 C 遺跡
26. 大橋 E 遺跡
27. 三宅 B 遺跡
28. 野間 B 遺跡
29. 野間 A 遺跡
30. 中村町遺跡
31. 大橋 A 遺跡
32. 大橋 D 遺跡
33. 大橋 C 遺跡
34. 三宅 A 遺跡
35. 大橋 B 遺跡
36. 和田田原池遺跡
37. 若久 B 遺跡
38. 若久 A 遺跡

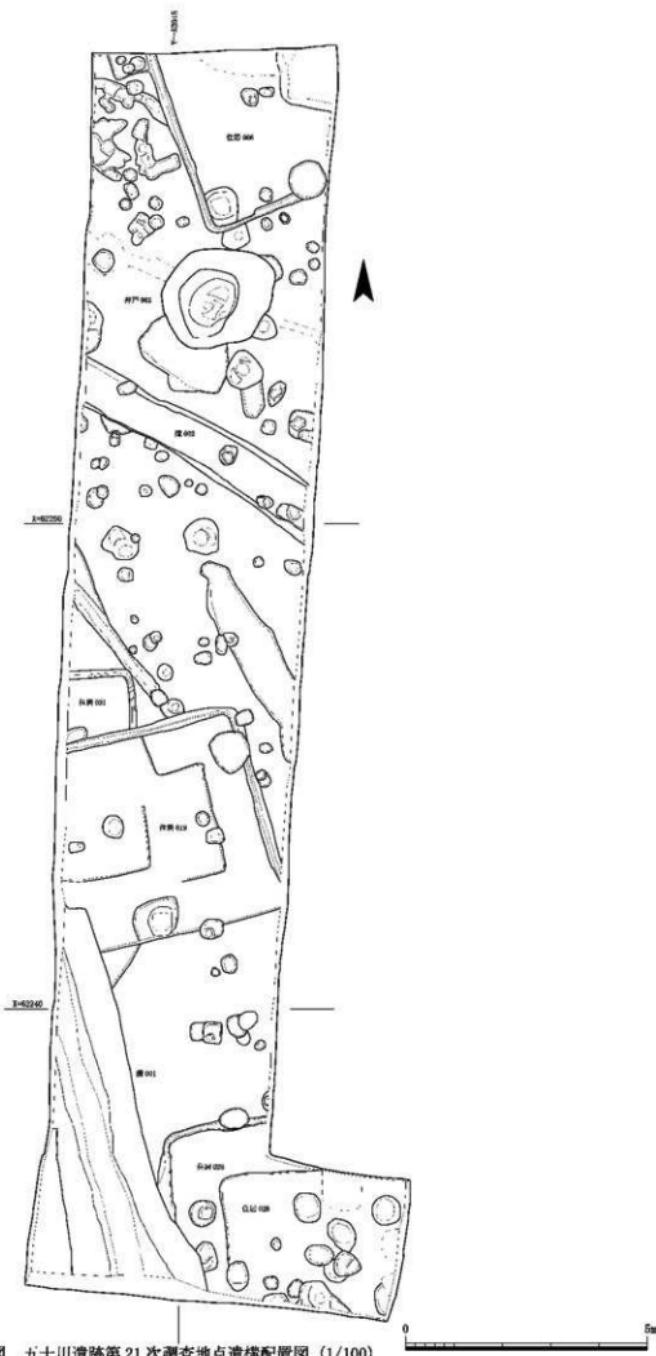
第1図 五十川遺跡群遺跡周辺分布図 (1/25000)



第2図 五十川遺跡調査地点位置図 (1/4000)



第3図 五十川遺跡第21次調査地点周辺遺構配置図 (1/500)



第4図 五十川遺跡第21次調査地点遺構配置図 (1/100)

第2章 調査の記録

1 調査の概要

今回報告する五十川遺跡第21次調査は、福岡市南区五十川2丁目に所在する。調査地点は五十川遺跡の東側に位置する。遺構検出は重機で遺構面である鳥栖ローム上面まで剥ぎ取って実施した。遺漏面は表土から約40cm下である。搅乱等はほとんどなく、全体として遺構の残りは良かった。検出遺構は堅穴住居5軒、溝2条、井戸1基、ほか多数のピットを確認した。

発掘調査は平成28年12月12日に行なった。まず重機で遺構面まで剥ぎ取りを行い、並行して発掘器材の搬入などを実施した。試掘調査の結果から申請地には遺構が多く存在することが分かっていたが、一部を盛土などして対応することから、工事で遺跡が破壊される範囲を調査範囲として設定した。遺構検出の結果、堅穴住居や大溝など多くの遺構を確認した。平成29年1月31日にすべての調査が完了した。出土遺物はパンケース14箱分である。

2 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査遺構及び出土遺物について報告する。

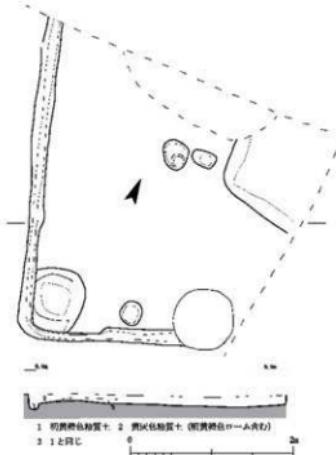
1) 堅穴住居

堅穴住居006(第5図) 調査区北端で確認された堅穴住居である。一部が調査区外に延びているため、平面プランや規模などは不明である。確認できた部分での規模は、南北約4m、東西約2mをはかる。壁面は約15cm程度遺存する。また幅30~40cm、床面から深さ約3~10cmの壁溝が巡る。床面ではピット等はほとんど確認することができず、主柱穴は不明である。

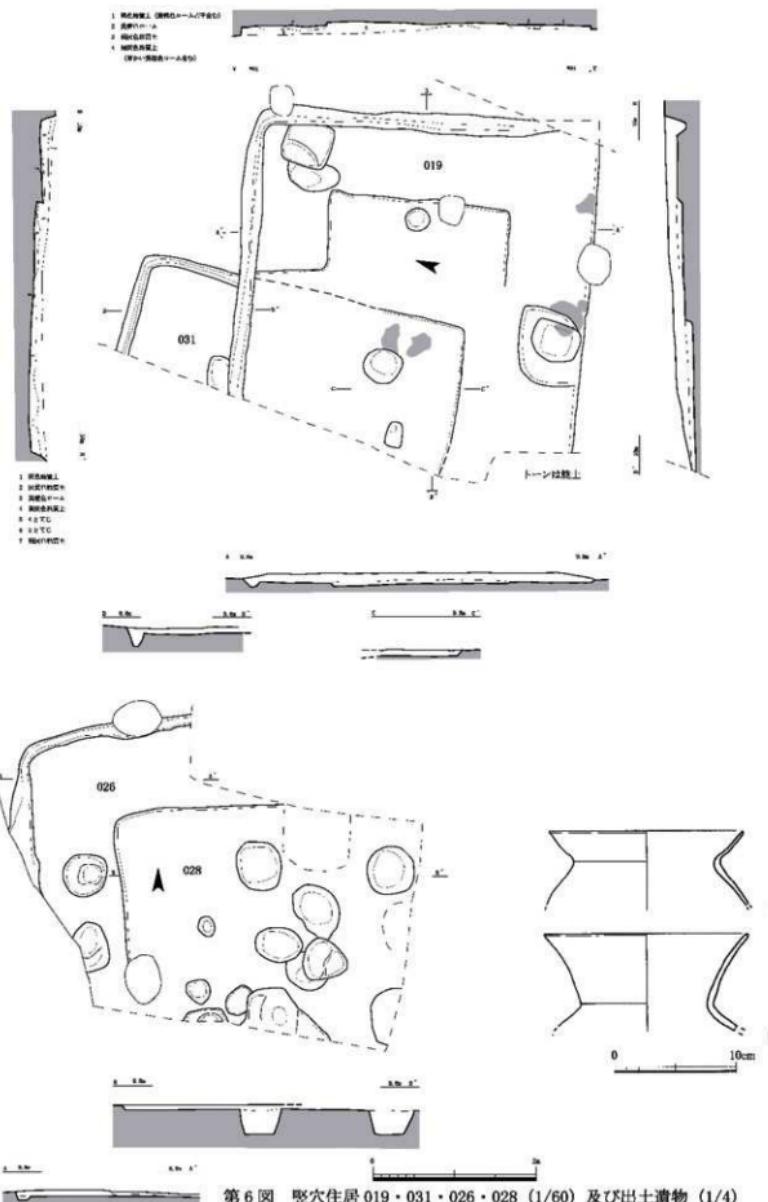
出土遺物 土師器片、須恵器の壺片などが出土しているが、碎片のため固形化できなかった。

堅穴住居019(第6図、図版1) 調査区中央で検出した方形の堅穴住居である。一部が溝001に切られ、また調査区外に延びているが、凡そ全体像は把握できた。調査区内の規模は南北長4.5m、東西長3.6mである。住居東側に幅80~100cmでコの字状にベッド状遺構が存在する。壁面は15cm程度遺存する。幅約20cm、床面から深さ約3~10cmの壁溝が北側と東側に巡る。西側には焼土が存在する。主柱穴は不明である。

出土遺物(第6図、図版2) 1は土師器の壺。口径は16cm、器高は残存6cmをはかる。全体的に磨耗しており、調整がわかりにくいところが多いが、およそ全体的にナデ調整か。器壁は非常に薄い。焼成は良好。胎土は密。色調は褐色を呈する。他にも土師器片、須恵器片が出土している。



第5図 堅穴住居006 (1/60)



第6図 横穴住居 019・031・026・028 (1/60) 及び出土遺物 (1/4)

竪穴住居 031 (第6図) 竪穴住居 019 の北側で確認された竪穴住居である。住居 019 に切られている。住居 019 内で南側の一部を検出している。おそらく平面プランは方形であり、確認できる規模は南北長 4.2m、東西長 1.8m をはかる。壁面は北側で約 8cm、南側で約 10cm 遺存している。また北側と東側の一部に幅 20cm、床面からの深さ約 5cm の壁溝が巡る。主柱穴は不明である。

出土遺物 土師器片が出土しているが、破片のため図化できなかった。

竪穴住居 026 (第6図) 調査区の南側で確認された竪穴住居である。竪穴住居 028 と溝 001 に切られている。確認できる規模は南北長約 1.8m、東西長約 2m をはかる。壁面は 3cm 程度遺存している。また幅約 15cm、床面からの深さ約 7cm の壁溝が巡る。主柱穴は不明である。

出土遺物 土師器片と須恵器片が出土しているが、破片のため図化できなかった。

竪穴住居 028 (第6図、図版1) 調査区の南側で確認された竪穴住居である。一部が攢乱に切られ、また東側と南側が調査区外に延びる。確認できる規模は南北長約 2m、東西長約 2m をはかる。壁面は 2cm 程度遺存している。壁溝は確認されなかった。主柱穴は不明である。

出土遺物 (第6図、図版2) 2 は土師器の長頸壺。口径は 16.8cm、器高は残存 8cm をはかる。調整は全体的にナデ調整か。焼成は良好。胎土は密。色調は褐色を呈する。

2) 溝

溝 001 (第7図、図版1) 調査区南側で確認され、南北に延びる大溝である。調査区内で全長約 9m、幅 1.8m、深さ 1.3m をはかる。検出面から深さ 1m のところで湧水し始めた。断面は逆台形を呈する。覆土は全体的に暗灰褐色粘質土や暗褐色粘質土であり、しまりが非常に強い。

出土遺物 (第7図、図版2) 3 は須恵器の壺蓋。器高残存 1.6cm、つまみ径 1.9cm をはかる。つまみは宝珠がやや扁平した形である。天井部はヘラ削り、体部は回転ナデ、内面中央付近はヨコナデ調整。胎土は密。焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。4 は越州窯系青磁碗。器高は残存 2.1cm、高台径 5.2cm をはかる。高台は貼り付け高台。全体に濃緑色の釉薬を施している。胎土は黄灰色を呈し、密である。焼成は良好。ほかに須恵器片、土師器片などが出土している。

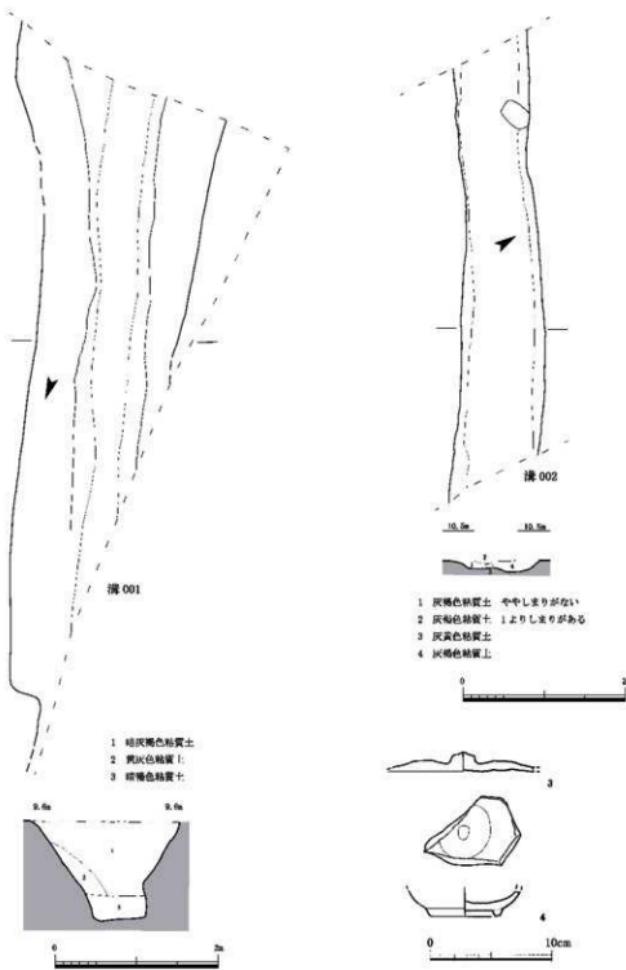
溝 002 (第7図) 調査区の中央やや北側で確認され、東西に延びる溝である。調査区内で確認できた全長は 5.8m、幅 90cm、深さ 10cm の浅い溝である。

出土遺物 土師器片、須恵器片、瓦片が出土したが、破片のため図化できなかった。

3) 井戸

井戸 005 (第8図、図版1) 調査区北側、住居 006 の南側で確認された素掘りの井戸である。平面プランは円形を呈する。径約 3m、深さ 2.5m をはかる。検出面から 30 ~ 40cm 下を最上層、40 ~ 80cm 下までを上層、80 ~ 115cm 下までを中層、115 ~ 200cm 下までを下層、200 ~ 250cm 下までを最下層として便宜上分けて遺物を取り上げた。覆土は黒褐色粘質土である。

出土遺物(第9図、図版2) 5 ~ 11 までは最上層・上層からの出土。5・6 は須恵器の壺蓋。5 は、器高は残存 1.6cm、つまみ径は 1.5cm。つまみは扁平である。天井部の調整は磨耗が激しくハツキリしないが、ヘラ削りと思われる。他の調整も磨耗が激しく不明である。胎土は密。焼成は不良。色調は明茶褐色を呈する。6 は口径 12.2cm、器高 2.1cm、天井径 8.2cm をはかる。調整は天井部がヘラ削りで、体部から口縁部にかけては回転ナデである。また内面中央付近は他方向のナデが施されている。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰褐色を呈する。7・8 は須恵器の高台付壺(坏



第7図 溝001・002 (1/60) 及び出土遺物 (1/4)

B)。7は口径13.9cm、器高4.2cm、底径4.6cm、高台径8.2cm。高台は貼り付け高台。調整は回転ナデであり、外面には灰が付着している。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰黒色を呈する。8は口径が不明、器高は残存3.3cm、底径12.2cm、高台径9.7cm。高台は貼り付け高台。調整は、底部は磨耗が激しくハッキリしないが、ヘラ切りか。体部外面は磨耗が激しく調整不明。体部内面は回転ナデ調整。焼成はやや不良。胎土は密。色調は茶褐色を呈する。9は須恵器の高台付坏(坏B)か。器高は残存2cm、高台径8.8cm。高台は貼り付け高台。底部にはヘラ記号がある。調整は底部がヘラ切りのちにナデ調整。その他は回転ナデ調整である。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰黒色を呈する。10は軟質系の土器か。口径は18.2cm、器高は8.3cm、底径は12.1cm。調整は底部がヘラ切り後にヘラ削りを施し、最後にナデ調整を行っている。その他は回

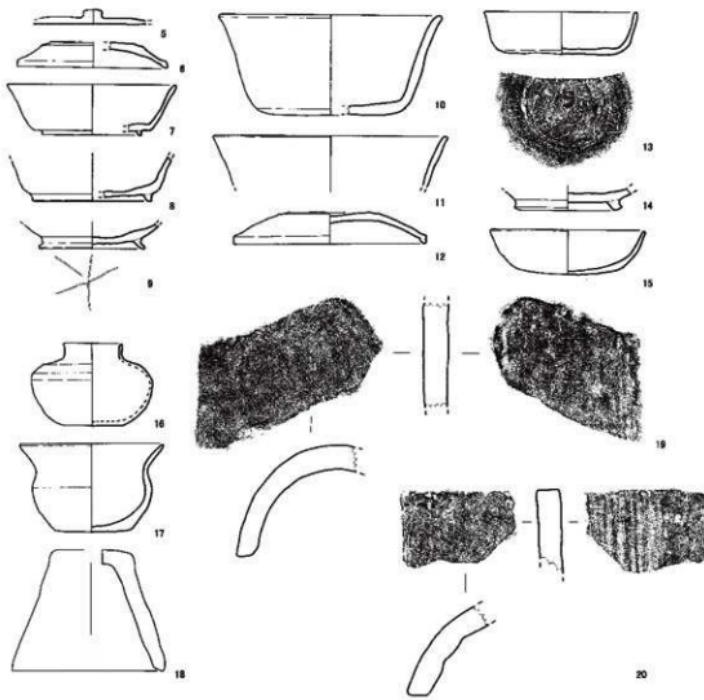
転ナデ調整。焼成はやや不良。胎土は密。色調は灰白色を呈する。11は須恵器の坏。口径は19.3cm、器高は残存4.2cm。調整は全体に回転ナデ調整、外面に灰が付着している。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰白色を呈する。その他にも須恵器の壺、壺、壺B、土師器の壺、壺、高坏などが出土している。

12～15・19・20は中層からの出土。12は須恵器の坏蓋。口径は15.7cm、器高2.5cm。調整は天井部がヘラ切り、内面中央附近が他方向のナデ、その他が回転ナデである。全体的にやや焼きゆがんでいる。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰色を呈する。13は須恵器の坏A。口径は12.6cm、器高は3.5cm、底径は10.4cm。底部には直線のヘラ記号がある。調整は底部がヘラ切り、内面底部がヨコナデとナデ調整で、その他が回転ナデ。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰褐色を呈する。14は須恵器の高台付坏(坏B)。器高は残存1.9cm、高台径は8.9cm。高台は貼り付け高台。全体的に焼きゆがんでいる。調整は底部がヘラ切り、内面底部がヨコナデ、その他は回転ナデ。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰黒色を呈する。15は土師器の坏。口径は12.8cm、器高は3.7cm。調整は底部がヘラ切り後にヘラ削りか。その他は回転ナデ。焼成は良好。胎土は密。色調は黄褐色を呈する。19・20は丸瓦。19は残存長9.6cm、残存幅10.2cm厚さ2cm。一枚作り。凹面には布目と模骨痕がある。凸面はナデ調整。焼成は良好。胎土は密。色調は灰白色。20は残存長6cm、残存幅9cm、厚さ1.9cm。凹面には布目と模骨痕がある。凸面はナデ調整。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰色。その他に土師器片が多く出土している。

16～18は下層・最下層からの出土。16は須恵器の短頸壺。口径4.4cm、器高6.7cm、底径4.7cm。内部には鉄分と土が凝固したようなものが付着しており、内面の詳細は不明。調整は



第8図 井戸005 (1/40)



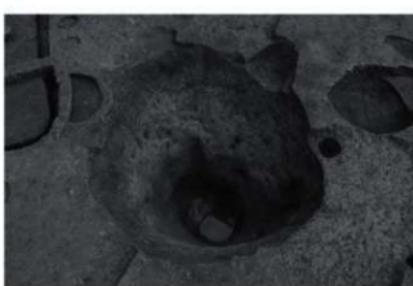
第9図 井戸005出土遺物(1/4)

0 10cm

底部がヘラ削り、他が回転ナデ。焼成は良好。胎土は密。色調は暗灰色を呈する。17は百済系の土器か。軟質系の土器であると思われる。口径は11.8cm、器高は7.2cm、底径は6.2cm。調整は底部がヘラ切り、内面底部がヨコナデ、他が回転ナデである。全体的に磨耗している。焼成はやや不良。胎土は密。色調は白灰色を呈する。18は土製支脚である。逆コップ形を呈し、頂部に円孔がある。全体的に火を受けた痕跡は見受けられない。

第3章 小結

本調査地点で確認された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居、7世紀代の井戸、古代の溝である。五十川遺跡の東側において古墳時代から古代にかけての集落跡を明確に確認できた事例は少なく、今回の調査でその様相の一端が明らかになった。また本調査地点の北側には五十川八幡宮があり、八幡宮とその周辺の集落の関わりを考える上での重要な資料になった。ただ調査面積の狭さからその遺構の広がる範囲などは明らかにすることはできなかった。今後の周辺調査の増加に期待したい。



図版 2



(6) 溝 001 出土遺物



(7) 井戸 005 上層出土遺物



(8) 井戸 005 中層出土遺物



(9) 井戸 005 下層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ごじゅつかわいせき9						
書名	五十川遺跡9						
副書名	一五十川遺跡第21次調査の報告—						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1331集						
編著者名	山本晃平						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2018年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
ごじゅつかわいせき 五十川遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ふくおかしみなみく ごじゅつかわいせき9 福岡市南区五十川 2丁目251-1	40134	88 33° 33' 36"	130° 26' 23"	2016.12.12 ～ 2017.10.31	125	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
五十川遺跡 第21次調査	集落	古墳時代前期 飛鳥時代 古代	堅穴住居 井戸 溝	須恵器、土師器、瓦	古墳時代前期と古代の集落跡を確認した。		
要約	<p>五十川遺跡は、福岡平野の中央部にある南北約800m、東西約240mの広さを持つ独立台地に立地している。北端で郡河・比恵遺跡群が展開する台地に連なり、南側の台地には井戸B遺跡が隣接する。本調査地点は、台地の東部に位置し、第3次、第4次調査地点の北側にある。</p> <p>検出遺構は、堅穴住居5軒、溝2条、井戸1基、他ピットである。五十川遺跡の東端において古墳時代前期と古代の集落跡を明確に確認した。</p>						

五十川遺跡 9

—五十川遺跡第21次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1331集

平成30年3月26日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 有限会社宏栄社印刷
福岡市南区清水1丁目10番5号
(092) 552-4967

